オリンピックと言語

インタビュー

オリンピック通訳の仕事

アンドリュー・ミーハン（右田）さん
に聞く

聞き手：塚原信行
つかはら・のぶゆき（本誌編集委員）

オリンピックの現場で、通訳者は何を求められ、実際に、どんな仕事をしているのか。北京（2008年）、ロンドン（2012年）、ソチ（2014年）大会での国際オリンピック委員会（IOC）通訳者の経験をもつアンドリュー・ミーハン（右田）さんを訪ねた。右田さんは、現在、2020年東京オリンピック、2022年北京冬季オリンピックに向けての関連事業にも携わり、多忙な日々を送っている。今回、専門用語など通訳者に求められる知識やスキル、ビジネスにおける通訳との比較など、貴重なお話をうかがった。

■■■ 生い立ち

――（塚原信行）ご出身はどちらですか？

長崎県の佐世保です。父はアイルランド人、母は日本人で大阪生まれです。

――ご家庭では英語を使われていたのですか？

家では、基本的に日本語です。小学校は、米軍基地のなかのアメリカンスクールに通っていましたので、そこでは英語です。でも、アメリカンスクールといっても田舎でしたので、授業は英語でしたが、休み時間や放課後には日本語を話す子もかなりいました。ですから、卒業時、日本語も英語も話すことはできましたが、どちらも中途半端だったように思います。

中学と高校は神戸のカナディアンアカデミーに進みました。大学はアメリカのアリゾナ大学の工学部で、電子コンピュータ工学を学びました。とくに父が、幼少時代は日本で暮らすとしても、大学はやはりアメリカかヨーロッパの大学に進んでほしいと望んでいました。

――現在の、日本語ー英語通訳者というお仕事のベースに、それらの環境がありそうですね。

そうですね。日本語のほうは、大学卒業後、アメリカの日系企業に勤めましたので、その仕事をとおして身につけていったという感じです。ニューヨークの住友銀行でしたが、周りは日本の大学を出た人たちでしたので、かれらから、よくおこられながら、指導されました。当時、わたしの日本語には、へんな訛りがあるとよく言われていました。佐世保弁と大阪弁です（笑）。

■■■ 通訳者を目指して

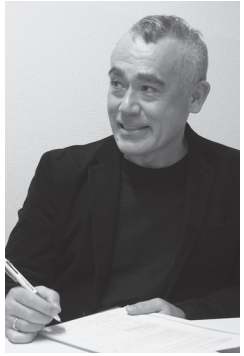
――銀行では、どんなお仕事をされていたのですか？

アナリストとして入行しましたが、頻繁に、翻訳――契約書やマニュアルの翻訳とか、顧客や日本本社との日本語のやり取りの翻訳――を頼まれました。日系企業では、現地採用のバイリンガルは翻訳係にまわされることが多いんです。ニューヨークに限らず、ロスでもシカゴでも、どの企業でもそうです。

その後、法律事務所に転職してからは、日本で言えば社内通訳みたいなこともしていました。パラリーガルといって、弁護士のアシスタントのようなポジションでしたけど、採用早々から、「日本のクライアントが来るから通訳してほしい」と言われて。難しいテーマでたいへんでした。

――その後、日本に戻って通訳の仕事を始められるのですか？

アンドリュー・ミーハン（右田）さん
Andrew Meehan



1968年、長崎県生まれ。1994年より翻訳者・通訳者としての活動を開始。国際会議等での総理大臣、各国大統領・大臣等の通訳をはじめ、国外での訴訟・裁判での通訳など、第一線で活躍する。AIIC（国際会議通訳者連盟）メンバー。株式会社ミーハングループCEO。同社は、翻訳（70言語対応）、通訳者派遣ほか、校閲・デザイン・コピーライトまで、多言語を扱う幅広い業務を展開する。